

# ミャンマーに魅せられて

株式会社マリックス 相談役（東船大E17）竹口 省三

## はじめに

ミャンマーの関係官庁の話では2000名を超える同国船員が日系船主の船に乗っているとのことで、ミャンマー船員と乗船経験がある海洋会会員のかたはかなりの数になるのではと思われます。この国の人たちの優しく遠慮勝ちの性質はどこか日本人に似ていて、このことが多くの日本人がミャンマーの人たちに感じる親近感の原因となっていると考えています。

15年ほど前、船員教育に関する政府援助に関わることで訪問をした際に感じたこの国の人たちの優しさに惹かれて、中東への出張の際にバンコクでのトランジットを利用したり、シンガポールから足を延ばしたりして、折に触れてこの国に通うようになりましたが軍事政権に対する国際社会の制裁で仕事の可能性は全くなくなっていました。

その頃、現地で知り合った人たちに何かできることがないだろうかとの相談したところ、飲料水に不自由している村に「井戸」を掘って欲しいと頼まれ、初めのうちは誰にも言わず個人でやりましたが5年ほど経った頃にミャンマーへ誘った友人が援助をしてくれました。それがきっかけと

なって、折に触れて寄稿したり他の人にも話すようになり、今では高校や大学の同期生、大学の先輩や後輩たち、親戚や友人たち、仕事でつきあいのある欧州企業の経営者たちと支援してくれる人の輪が広がってきました。

活動している地域はヤンゴンの西方に広がるエーヤワディ地区というデルタ地帯です。雨期には道路が冠水してボートしか使えないような地域で水は豊富にあるものの、そのままでは飲料水としては適していないという地域に村落が散在しています。

## 1. 井戸を贈る

今年は「ミャンマーへ井戸を贈る」活動を始めて12年になります。この間に設置した井戸の設備は63か所になり、ひとつの井戸設備を1,000人程度が使用していますので60,000名以上の人たちが利用してくれていることになります。

設備は写真にもあるように「機械棟」と「水槽棟」の2棟で構成され、この2棟の間に非常用としての手押し井戸ポンプを設置しています。現地には井戸掘りの技術があり私たちは資金的な援助をしています。当初は日本から技術者を含めて資機材を送り込んで井戸を掘ると考えていましたが、しかし、それでは個人で負担し続けるには毎年1か所程度しか援助できないことが判り、現地の「技術はある」という助言に従って、予定していた費用で初年度から5か所の井戸を掘り贈ることができました。

## 2. 持続性

政府援助でも問題となるのは維持費であり、途上国では億単位の費用で援助された設備でも交換部品が買



ヤンゴンのシンボル、シェダゴンパゴダ



完成した井戸設備  
(左が機械棟、中が手押しポンプ、右が水槽棟)

えないため使用されていないことが往々にしてこととはご存知のとおりです。

私たちの「井戸設備」の援助でも同じで、設備を贈っても燃料や部品が購入できないと設備は使えないこととなります。この解決に為に「発電機」を付加することにしました。もともと「井戸設備」を贈る村にはコミッティー(管理委員会)を設立して貰って、責任者や技術担当を決める等、維持管理に関する覚書を交わしていました。しかし費用負担ができる人が限られる貧しい村では、機器の修理等ができなくなり、非常用の手押しポンプの利用が常態化することがありました。それを解決するために「電力」を供給して蛍光灯を学校や道は無償で点灯し、個人で灯火が欲しい人には蛍光灯を設置し、彼らが使っていた蠟燭の費用を徴収してプールするというシステムを考えました。井戸の水は夕方に貯水槽を一杯にしておいて、原動機を発電機に切り替えて21時頃まで電気を供給しています。

また、学校は雨が降るとガラス戸の無い窓を閉めるため真っ暗になって授業のできないということで、学校へ電力を送ることにしました。当初の援助費用は大幅に増えますが継続的な維持ができることになり現地の人たちに役立っています。電力を付加した当初は5.5kWでしたが、7.5kWになり、現在は大きな村では11Kwとなっています。11kWでは100戸以上の家で灯火やテレビが使用されていて、徴収した蠟燭代で燃料を購入し、設備の修理費用の積み立てをし、余剰金で貧困家庭の学童の教育費を負担できるようになりました。今年、井戸の

引き渡しのため或る村に私たちがいたとき、2年前に設置した村の校長先生が「子供の学費を賄えるようになった」とお礼にきてくれ、私たちの活動が役立っていると実感しました。

### 3. 贈ることの喜び

私たちが井戸設備を設置して、引き渡し式には、賑やかな音楽が鳴り響く中、殆どの村人が参加して、お祭りのような雰囲気の中、子供たちが歌や踊りで歓迎してくれます。村人から頂く感謝の言葉や態度に接して、日本からの訪問者の多くが臉を拭うこともあるほどで、贈られた村の人たちよりも、贈った私たちのほうが得るものが多いと感じています。

### 4. 学用品

ミャンマーの義務教育は初等教育の5年間ですが、10歳ぐらいになると農家の手伝いができ、幼い弟や妹の面倒をみることができるようになるため、貧しい家庭では義務教育でさえ通わせていないのが実情です。社会主義時代から教育は無料で識字率は90%を超えていますが、教科書や学用品は親の負担となるため、教科書が買えないために学校へ通わすことのできない家庭もあります。前述の校長先生がみえたのは、貧しい家庭の子供が通学できるようになったことへのお礼でした。また、先生の給料も安く、田舎の村では先生に食料を届けたりして先生の生活をサポートしているようでした。



踊りで歓迎してくれる村人たち

## 5. 船員教育

国内での仕事が限られる中であって、船員は給与が高く外国に出られることもあり、若者のあこがれの職業であり、部職員を問わず結婚相手として女性にも人気があります。高等船員教育は運輸省傘下のMyanmar Maritime University (MMU) と Myanmar Mercantile Marine College (MMMC) が担っていて、MMUの志願者の成績は医学部志願者よりも高いとのこと。しかし教育設備は限られており、練習船が無いため乗船経験を効果的に積むことが難しく、関係者の最大の悩みとなっていて、船員教育について海洋会会員の出番があると考えています。

## 6. MMUの卒業式

今年MMUの卒業式に招かれて出席しました、全学生が角帽を被り、儀式用の衣を纏って、運輸副大臣を主賓として、学生たちの両親も招かれていて華やかで盛大なものでした。来賓として招かれた人たちと歓談する機会がありましたが、日本の関連団体や企業の姿が無いのは残念でした。



MMUの卒業式

## 7. 最近の事情

最近では新聞にミャンマーの文字がでない日が無いほど関心が高いようです。2010年11月に総選挙が実施され、議会の成立を経て2011年3月にテインセイン大統領による新政府がつくられました。同年5月に施政方針を発表してもマスコミは引退した軍事政権のタンシェ元議長の傀儡との論調が目立っていて、一部のミャンマー専門家以外はミャンマーの変化を無視していましたが、日本政府はいち早く援助の再開を表明していたが、ノルウェーの制裁解除を皮切りに多くの国が追従



米企業 Apple のコマーシャルも

し、雪崩をうってミャンマー詣でが続いています。2012年1月には米国のオバマ大統領とクリントン国務長官がヤンゴンを訪れ、テインセイン大統領およびスーチー女史と会談して、米国が制裁解除へ大きく舵をきりました、日本や韓国企業の広告が多かったヤンゴンの街に、アップルやコカコーラ、DCNY等のアメリカ企業の広告が目立つようになっていきます。

## 8. 車事情

ミャンマーといえば古い日本車が大事に使用され、20年以上の登録の小型車が300万円以上、数年前登録の四駆であれば2000万円以上で流通しているという国で、ミャンマーの人たちは世界一車の価格が高い国と笑っていました。2011年秋に新政府は車のスクラップアンドビルドを進める方針を打ち出して、40年前の登録車、30年前の、20年前と順次輸入ライセンスを発行して車の更新を進め、今では街を走る車が一新されました。ガソリンの消費削減と排気ガスの浄化には大いに役立っていると思われます。この過程で16万台を超える中古車が輸入され、その殆どが日本の中古車であったため日本での中古車価格が高騰したということでした。この当時ヤンゴン港で見た日本からのコン

テナの中身は殆どが中古車でした。

## 9. 首都ネピドー

ヤンゴンから高速道路を使って約5時間の距離



片道10車線の首都の道路、左前方は国会議事堂

にある新首都ネピドーへの移転は2006年10月10日でした。首都移転の理由については種々の噂があるが真相は判りませんが、森の中に作られた広大な都市で、車が無くては移動もままならなりません。政府職員も宿舎からはフェリーと呼んでいる送迎バスで通勤していて、車を持たない彼らには早退もままならないと笑っていました。計画都市であり、ホテル区域、商業区域、学校区域等、となっているようですが目的の役所に行くのに新首都に慣れていない運転手は何度も迷った。何しろ森の中の建物は主道路からは見えませんし、道を聞くにも人は見当たらず、車も殆ど見かけないためたいへん難儀をしました。議会前の通りは片道が10車線となっていて、これほど広い道を初めてみましたが、車も殆ど見かけない不思議な光景で



数百台の日本からの輸入車を展示しているディーラー

した。それでも多くの企業が支店をホテルの中においていて、将来的には首都として充実してゆくのだろうと思われました。

## 10. NPO設立

私は、ある年齢で引退して自由を楽しんでいる欧米の人たちのように、許されるなら65歳を目途としたいと考えていた。そのために公私ともに準備を続けてきたが、昨年66歳になる前に経営責任の無い相談役になって時間にもある程度の自由がもてるようになった。引退後のミャンマーでの活動の場として3年前にNPO（非営利活動法人）を登録して準備してきましたが、最近のミャンマーを巡る環境の変化で多くの人たちと接する機会が増えて、NPOの活動だけに専念できないでいます。

縁あって関わっているミャンマーという国には、何らかの魅力があって、知人のなかにも、定年を契機にヤンゴンへ移住した大学教授、ミャンマーに魅せられ移り住んだ写真家、退官後も家族で定期的にミャンマー訪問を繰り返している元外交官、帰任後も繰り返しミャンマーを訪れている商社員等がいます。戦時中にこの国の人に命を助けられ



ゴールデンロックパゴダ（観光資源も豊富）

たと、ミャンマーからの留学生を援助している経営者もいます。私もミャンマーに魅せられた者として、開放が始まっているものの、多くの困難に直面しているこの国に何らかの貢献ができればと願っています。

## 11. 将来について

1948年に英国から独立をしたときミャンマーは東南アジアでは最も進んだ国として、日本航空の南回り便もラングーンと呼ばれていたヤンゴンが経由地でした。しかし、60年に及ぶ国内政治の混乱と軍事独裁によって国際社会の制裁下に置かれたミャンマーは発展から取り残されてしまいました。1980年頃の中国を見ていた私には、ヤンゴン川に沿った英国植民地時代の建物群が上海の外灘に似ていると思われ、発展した20年後の姿を想像しています。

また、ミャンマーでは8割が小乗仏教の信者で、多くの人の子供のときに出家して頭を丸めてお寺に入り「年寄りを敬う」「殺生をしない」「嘘をつかない」等々を学ぶそうで、このことがこの国の人たちの気質に関係しているように思われます。

また、第二次大戦のインパール作戦は、武器弾薬・食糧は現地調達という作戦だったとのことで、日本は占領軍として大いにこの国に迷惑を掛けたのでしょうが、この国の人たちの日本人に対する感情は良いように思います。街を走る車のほとんどが日本製、電化製品をはじめとする日本製品への信頼たいへん高いと感じています。海洋会会員はミャンマーの人たちに接する機会が多いと思われませんが、この親日的な国の人たちとの関係を維持・発展してゆくことを心の片隅に置いて頂ければと願っています。

## おわりに

最後になりましたが、ミャンマーでの井戸事業に支援して頂いている多くの先輩、同期生、後輩の皆様へ感謝するとともに、更なる援助をお願い申し上げます。

完